

第 28 回 2014 年 8 月 27 日 (水)

ゲスト 和田省一 (朝日放送 代表取締役副社長)

テーマ「ABC ヤングリクエスト」「おはようパーソナリティ中村鋭一です」(ディレクター)

そしてテレビの「サンデープロジェクト」(放送開始時のプロデューサー)

主な内容

- ◎夏の高校野球・視聴率 今年 NHK と大接戦
- ◎入社 1 年目はラジオの編成セクションに
- ◎40 年以上続くラジオ番組「おはよう浪曲」
- ◎ラジオの編成に新風 「おはようパーソナリティ中村鋭一」
- ◎中村鋭一さんは釣りとゴルフと俳句 それにタイガースファン
- ◎ラジオメディアとテレビメディアの違い
- ◎ポスト「中村鋭一」に 30 代の「道上洋三」を起用
- ◎阪神タイガースの歌「六甲おろし」誕生秘話
- ◎突然 テレビのニュースデスクへ
- ◎「サンデープロジェクト」の編集長に 共同制作のキー局テレビ朝日に乗り込む
- ◎国際的事件相次ぎ「サンデープロジェクト」報道色強める
- ◎“ABC はもう一つのキー局” 共同制作の難しさ感じた 4 年間
- ◎コメンテーター田原総一郎氏との関係は
- ◎これからのラジオは AM から FM そしてインターネットラジオ
- ◎高齢者と若い層の棲み分け メディアの課題
- ◎若い放送人に伝えておきたいこと
- ◎「現実の皮を一枚めくった所にある本当の姿えぐり出す」 メディアの仕事

司会 夏の甲子園が終わると、夏もぼちぼち終わりかな、秋になるかなという感じがします。連日放送で大変だったと思いますが、朝日放送・代表取締役副社長の和田省一さんをお迎えいたしました。ようこそお越しくださいました。

和田氏 大先輩ばかりいらっしゃる場所にお招きいただきまして恐縮しております。今日はどんなお話が出来るか分かりませんが、メモなども作ってきましたので、いろいろお話をさせていただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

司会 7月が関西テレビの監査役、今回は現役の副社長、来月は元朝日放送社長の西村さんと偉い人がだだだ。もうこれ以上はありませんので。冒頭、私がちょっとお話ししましたが、高校野球が終わると、やっぱり ABC としては一段落という感じなんでしょうか。

和田氏 そうですね。夏の間は、特にスポーツ、報道、編成、営業とか現場が休めなくて、時間外があんまり多くなってもいけないんです。高校野球が終わったら皆、かなり休み取ってくれということになりますから、お盆期間よりも8月終わりから9月にかけてのほうが夏休みを取る人が多いと思います。

司会 特に今年は大阪桐蔭が優勝しましたので、かなり ABC としては盛り上がったんじゃないですか。

和田氏 そうですね。視聴率も桐蔭の部分はかなり高かったです。

司会 つかぬことを伺いますが、高校野球の視聴率って、大体どのくらいあるんですか。

<夏の高校野球・視聴率 今年 NHK と大接戦>

和田氏 本大会の実況中継はスポーツ番組では、唯一独占ではなくて、NHK と ABC がパラで生中継をしているという、極めて珍しい形ですから、どうしても関西では二分されるということで、8月の全日の ABC の視聴率はここが底になるんです。大抵月間で6%台に落ちるんですが、これを抱えながら年間で全日の視聴率トップを取るのはなかなか至難の業なんです。ただ今年は桐蔭が出ていた試合の準決勝の分だと、それは敦賀気比高との戦いだったと思いますが、ABC が 10.何%、NHK が 12.何%で合わせて 22。プラス BS 朝日がありますから、そういう面でいうと午後帯の時間帯で極めて高い視聴率が取れたというのはありますが、ただ2日目・3日目のところで午後帯に 1.9%というのが出たりしまして、なかなか普通の試合は厳しいですね。

司会 和田さんは京都大学を卒業されまして、1970年にABC朝日放送に入られました。先だっの打ち合わせでは、本当はTBSでドラマを作りたいというようなことでしたが、その年の採用がなかったんだそうですね。もし採用があったら、和田さんご自身も、あるいはTBSも違った展開になっていたかもしれないなど。朝日放送に入られて、ラジオ業務部編成課に配属されます。2年間ご勤務。その後、1971年から「おはようパーソナリティ」。中村鋭一さん。もうとにかくパーソナリティー番組のはしりのスタッフに入られた。その辺り、まずは前半、ラジオ時代のお話を、それから後半はテレビのお話を中心に、伺っていこうかなと思っております。1970年っていいますと万博の年ですよ。入社されました社内の雰囲気というのはどんな感じだったんですか。

和田氏 社内の雰囲気ですか。ラジオ業務部の隣にラジオ管理がありまして、ラジオ管理の部屋にラジオ局長の席があり、小池禮三さんという元オリンピックの水泳の選手の方が局長でいらっしゃるんですが、大抵、机で腕を組んで寝ていらっしゃるという、こういう状態でした。というぐらい、その当時、局長っていうのはすごい偉いんだなと思いました。割と課長に権限があるような感じ、新入社員からすれば課長が直属の上司、そういう風な感じでした。ラジオの世界では、当時OBCが非常に強くて、次いでABCでその次がMBSという状態です。それをABCが逆転していくと。その次にMBSが逆転するという。ラジオは聴取習慣、日常生活の中での習慣ですので、一度トップに立つとしばらくは続いて、10年あまり続いて、次、またトップが代わると。そうするとまた長く続くみたいなおことで、現段階では割と三社が拮抗している。三社といいますのは、FM802とMBSとABCという状況で今は毎回トップが代わるような状態ですが、このところ2回連続でABCが三冠を取っているということなんです、ただいつ802がトップになってもおかしくないし、MBSがトップになってもおかしくない状況だと思えます。

—— 入られて、ラジオ編成課というのは、もちろん、学生時代にラジオは聞いていらっしゃるんですか。

和田 受験勉強のときなんかは聞いていましたね。

—— 実際、自分が放送局に入ってラジオの番組を作るとかラジオに関わるっていうことになった場合に、どんな仕事が始まるんだと思われましたか

和田氏 自分はテレビのドラマが作れるものだと思って入ってきていますから、ラジオと

言われても全く想像だにしていまませんでした。とりあえずTBSの「七人の刑事」とかそういうところから「お前はただの現在にすぎない～テレビになにが可能か」（萩本晴彦、村木良彦、今野勉著、1969年、田畑書店）を書いた人たちと一緒に仕事が出来るといふ妄想の中にいましたから。実際にラジオ業務部の中に編成課と外勤の営業と内勤の整理課と三つの課があります。その中で編成というところに入って、外勤に脇阪が、内勤に水野というこの3人の同期がラジオ業務部に配属されるんですが、何十年か経って同期で役員になったのはこの3人だけだった。しかも脇阪が社長で、僕が副社長ということで言いますと、ラジオに配属されたというのは社員教育的にかなり良かったのかなと思います。そういう状態でしたね。

——— 実際の業務としてはどういうことだったのでしょうか。

<入社1年目はラジオの編成セクションに>

和田氏 基本的には編成ですから番組を編成していくという、購入したり、どのセクションに作ってもらったりという本来の編成の業務と宣伝、番宣の業務と二つありまして。新入社員ですので、当初は番宣の仕事が中心でした。ラジオ業務部長の吉川忠章さんとラジオ編成課長の今田 昭さんという1966年に「ABCヤングリクエスト」を作った人ですが、この人が当時編成課長で、僕などが入って朝帯をどうするかという検討チームが出来ました、編成本来の番組開発とか、そういうところにつながる仕事はそういうところから入ったという感じです。

——— 今、お話がありました「ヤングリクエスト」がすごい全盛期を迎えていました。ですから、ある程度ラジオがもう1回復興の兆しのある時期であったんですか。

和田氏 テレビをやりたくて入ったわけですが、ということはラジオが衰退に向かっている時期なんです。そのときラジオが蘇ってくるのに、ニューラジオ宣言ということが言われ、ラジオについてはセグメンテーションという議論を背景に深夜帯はヤングということで、深夜の番組は全て「ヤングリクエスト」「ヤングタウン」「セイヤング」「ヤングなんとか」ということでヤングというタイトルをつけないと成立しないというような時代でした。その先鞭をつけた一つが1966年スタートの「ヤングリクエスト」だったと思います。セグメンテーションをベースにした「ニューラジオ宣言」という本を入社したときに渡されました。これでラジオは復活してきたんだというような時代でしたね。

【注】「ABCヤングリクエスト」1966年4月～1986年10月、
月～土 23：10～26：00 （1967年4月から日曜日も）

—— 今、セグメンテーション、それからセグメント編成というのが ABC の社史にも出てきますが、深夜帯が若い人。早朝昼間、朝の時間帯、それから昼間の時間帯っていう、なんかこう、ターゲットを決めていかれたんですか。

<40 年以上続くラジオ番組「おはよう浪曲」>

和田氏 はい。もっとも成功事例が深夜のヤングと、勉強しながらの人を捉まえてということで「深夜放送ファン」という雑誌が出来たり、深夜放送というのでラジオが蘇ってきたということを言うと、セグメンテーションの最大の成功事例だと思います。朝帯をどうするかという議論のときに、朝をワイドにしていこうと。ところが朝は、10 分ベルト 15 分ベルトという細切れの帯が続いていたんですが、これが一番、売上げ的には貢献しているということで、ラジオのゴールデン帯なんです。これを全部ご破算にするというのが大問題で、どう検討するかということだったんです。その検討の副産物として「おはよう浪曲」という番組が出来ました。つまり浪曲の録りだめがいっぱいあるし、これを活用しようと。早朝帯はお年寄りがかかり起きていらっしやるんじゃないか、その人たちに浪曲をベルトで流したらどうかということで、「おはよう浪曲」という 30 分ベルト番組が朝帯の開発の余波と言いますか、副産物として生まれました。それも強いて言えば、セグメンテーション。朝帯はお年寄りがということで。

—— 「ラジオ深夜便」もかなり先駆けた考えですね。でも「おはよう浪曲」というのは、ちょっと思い切った番組で面白いですよ。

和田氏 そうですね。

—— なんでまたそんなにストックがあったんですか。

和田氏 その事情はつまびらかではないんですが、その朝帯の開発メンバーではないところからそういう話が出てきて、その話を聞いた人がその朝帯の開発の会議でそれを出したんですが、しかしそれはかなり古いテープだったようなんです。ですから、浪曲はラジオの昭和 30 年代前半のところでベスト 10 をとると、ベスト 10 の内の半分は浪曲番組だったということで言いますと、非常に浪曲が人気番組なんで、かなり収録したんだと思うんですね。ところがその浪曲が人気番組だった時期がそんなに長くはなかったんで、一度放送しただけとか、多分そういうことだったんだと思うんですね。

【注】「おはよう浪曲」1970 年 7 月～現在、

月～土 5:00～5:30、1989 年 4 月から土、日のみ 5:30 から

——— 実はこのメディアの会の中ではですね、昔あって今はなくなっちゃった番組の一つに、典型的なものとして浪曲の番組がなくなってしまったなという話があるんですね。そういうのをこの70年代の早朝にやっていたというのは知りませんでした。初耳で非常におもしろいアイデアだったなと思います。

和田氏 それで今も続いているんですね。ベルトではないようなんですが、今も続いていて。ストックがなくなって、当然新たに収録を始めていると。

——— そうですね。今、ちょっと和田さんの方からお話がありましたが、実は1971年4月1日から、ABCの社史にこう書いてあります。

「ABCラジオはこう決心しました。1971年4月1日より朝7時～9時までの2時間、番組を無くします。代わって登場するのはパーソナリティです」

『おはようパーソナリティ中村鋭一です』がスタートする際につくられた番組企画書の書き出し部分である。この数行は、新番組に賭ける意気込みとその内容を簡明に表していると同時にABCラジオの聴取者とスポンサーに向けたメッセージでもあった。

というようなことが書いてあります。これは、皆さん方でお考えになって、そして「さあ、こういうことをやろう」というかなり社内外に向けた、それからここにも書いてありますが、聴取者に向けた非常に大きなメッセージ、アピールであったわけですね。

<ラジオの編成に新風 「おはようパーソナリティ中村鋭一」>

和田氏 多分、この考え方は吉川忠章さん、ラジオ業務部長の発想が一番大きく影響していると思うんです。業務部長ですから編成と営業、売り上げに責任を持っている最前線のトップですが、売り上げが当面落ちることは構わないという決断をされたんですね。ですから、スポンサーも含めて全部まっさらということで、東京で片山竜二さんがTBSラジオでやっていらっしゃったのも、枠としてはワイドなんですが、ベルトが残っていた、録音が。そういう意味合いで、まっさらにしてパーソナリティーというのを打ち出したというので、ABC「おはようパーソナリティ」が番組の新たなジャンルを開発したと言われてます。全くのゼロにしたんですね、まっさらにしてしまったと。結果的には、番組を始めた途端に非常に人気が出て、すぐに売り上げが戻った、さらにそれ以上のものになっていったと。これはそのセクションを預かるトップの非常にすばらしい決断によるものだと思います。

——— という風に、新たに、パーソナリティーの中村鋭一さんの番組が出来ていくわけで

す。このラジオ番組を作っていく、編成していくにあたって、お手本となる方、お師匠さんとなる方がいらっしまったという風にお伺いしましたけれども。今田さんですか。

和田氏 今田 昭さん。先ほど申し上げました、当時、編成課長で、その前に「ヤングリクエスト」を開発したということで、生涯をラジオに捧げたと言ってもいいと思うんです。いまだにお弟子さんがいっぱいいて、僕なんかも弟子の端くれなんです。今もABCのラジオはイマダイズムで貫かれていると思います。でも、そのときに今田さんはそんなにまっさらにしなくてもいいんじゃないかという考え方だったんですね。まっさらにすべきだというのが吉川部長で、結果的にはそれで成功だったんですが、ただ今田さんとしては、ラジオはそんなに大胆なことをしなくても細やかな心遣いを端々に出していけば、それで聴取者に支持されるという考え方だったと思います。ただリスナーの心をつかむにはどうすればいいのか、送り手と受け手の関係はどうあるべきかというようなことについては、今田さんが師匠でした。いまもABCのラジオの番組は、エー・ビー・シーメディアコムという会社で主として作っているんですが、その社長の川崎君というのも、これまた今田 昭さんの愛弟子で、同志社大学の学生の頃からアルバイトでABC「ヤングリクエスト」の俗にいうお皿回し（レコードを再生）のバイトをして、そこから入社して「ヤングリクエスト」とかいろいろな番組を支えてきた。今、エー・ビー・シーメディアコムの社長としてABCのラジオ制作部門を支えています。いまだに脈々と今田 昭さんの考え方が続いていると言っていいと思います。

—— 深く影響を受けたというのは、いわゆる番組を作るテクニック上のものなのか。それとも何か哲学的なものなのか。

和田氏 基本的には精神的なことだと思います。それが手法のいろいろなところに「なぜこういう手法をとるのか」「なぜこういうことをやるのか」のベースのところの心構えということだと思うので、手法であり、心構えでありなんです。よく言われるのが、深夜放送「ヤングリクエスト」ではお喋りは一山の石炭であるよりは一粒のダイヤモンドであれという象徴的な表現があるんですね。それが壁に貼り出されているわけです。アナウンサーはべらべら喋るんじゃなくて、気の利いたことを少し言えばいいんで、聴取者、リスナーは音楽を聞きたいんだというようなことですね。

—— 本当に、いまだに新しい言葉ですよ。現役の人々にはそういうものはちゃんと伝わっているんですね。

和田氏 当然、それをちゃんと守る人もいれば反発する人もいるという。

——— そうですか。さあ、いよいよ中村鋭一氏の番組に入っていきたいと思います。中村鋭一さんは「鋭ちゃん、鋭ちゃん」というので大人気になりましたが、鋭ちゃんになる前の中村鋭一さんはどんな人だったのでしょうか。

和田氏 民放一期のアナウンサーで、主としてスポーツ畑を中心に来られた方で、極めて小まめにデータを作られる方とは対照的に、割とちゃらんぼらんにやってこられて、真面目に作られたデータを借りて放送したりとかですね。しかし、真面目に作った本人よりも面白い放送をしてしまうみたいな、そういう要領が良いというところがあつたかと思いますが、才能もあつた。電車に乗っている間に、目に入ってくるものを片っ端から言葉にして喋っていくとか、それなりの自分で開発したテクニックを磨く術といますか、そういう面では真面目にやっていらっしゃって。この70年より前のところは、2年間、朝日新聞・大阪社会部に出向して、社会部の新聞記者をしていて、そこで朝日新聞の中でもキャラクターが面白くて人気者になっていった。例えば、当時、お天気相談所長をしていた福井敏雄さんという方とも親交が出来て、自分の番組が始まった後は、その福井敏雄さんをラジオに引っ張り出して、訥々としたというか、真面目な人柄そのものが出てくるお喋りを生かしてお天気の話の聞くと。さらにその福井さんの徳島訛り、徳島日和佐の訛りが面白いというので、お天気相談所長ですから天気のことを喋る。そのときになんとか言われたのが、「おひいさんとともに」というようなことで、太陽が昇って起きて太陽が沈んで寝るといいますか。それが面白いっていうんで、それを福井敏雄さんの声でジングルとして使うというようなことをやったり。そういう福井さんとの人脈をはじめ、朝日新聞社会部で非常な人脈を作って、それが「おはようパーソナリティ」の中でいろいろな問題について切り込んでいくときに、助けてくれる人が朝日新聞にいっぱいいて、いつでも出てくれるというような状態だった。直前の2年間、朝日新聞社会部に出向して記者としてやっていたことが、取材力とかニュース感覚を磨くにしてもプラスになっていたと思います。

——— 我が社〈関西テレビ〉も後々は福井さんには随分お世話になったんですが、ルーツはそこにあつたんですね。さあ、そこでいよいよ番組を作るにあたって、どんな風なことが考えられて、それからどんな風に中村鋭一さんを、いわゆるワイド番組のパーソナリティとしてどういう風にしていこうとか。ディレクターとしてどんなことを考えられたのですか。

和田氏 そこは、僕はあまり詳しくはないんですが、先ほどの出野さんのお話の中で、1971

年に番組が出来て、その71年のときは僕はまだラジオ業務部編成課にいました。71年4月に番組がスタートしたときは7時15分から9時までだったんですが、2年目に9時半まで30分枠大になると。そのときにスタッフ1名増員しないといけないというので、その増員スタッフとして、僕が編成から制作に行って「おはようパーソナリティ」のスタッフになるということで、スタートの1年目は僕は外から見ていました。2年目は中に入って。そのときには、中川大棟梁というニックネームで呼ばれていますが、報道畑を主としてやってきた中川隆博さんという人と、技術系を主として歩いてきた相澤淳二さんという人と、あとは女性スタッフ、これはアルバイトなんですけれども。そこでどういう形で番組作りが行われてきたのかというのは、その1年目のところは、いま僕は詳しくはないんですが。

——— 和田さんが入られてからのお仕事はどうなんですか。

<中村鋭一さんは釣りとかゴルフとか俳句 それにタイガースファン>

和田氏 中村さんという昭和5年生まれ、昭和一桁ということがかなり言われた時代で、中村さんがパーソナリティーを前面に出すということで「立川文庫」だったり「少年倶楽部」だったりという、昭和一桁の世代にとっての懐かしいものといえますか、憧れたものとか、そういうものをいくつか取り上げていく。あるいは中村さんの好きな釣りとかゴルフとか俳句とか、もう1つは阪神タイガースという中村さんの好きなもの、あるいは生き生きと喋れるものの材料を揃えるというようなこと。それと今で言う昭和歌謡、軍歌だったりするんですが、それを鼻歌コーナーで歌うというような、そういう中村鋭一のキャラクターが全面的に出てくるものを準備する。あるいは時々の時事的なことでも、これは中村さんが話したら面白いなというようなことを原稿に書くと。そのときに中村鋭一さんがこの問題について喋ったらどういふことを言うかなというのが、原稿書いているときに中村さんの声が聞こえてくるんですね。こういう表現、こういう言い方っていうのが、ずっと架空の中村さんの声で喋っているのを原稿にしていくという風なそういう感じでしたね。

——— かなり中村鋭一さんのことが、やっているうちに、段々、こんな人柄ではないかと分かってくるわけですね。

和田氏 そうですね。

——— ただ、今おっしゃったようにギャップがかなりありますよね。

和田氏 世代的なギャップはありますね。

—— そのあたりはどんな風にして、埋めていかれたんですか。例えば文化一つにしてもご存じない。

和田氏 逆に僕なんかが分かるように説明してくれたら良いといいますが、逆に当然、パーソナリティーにこちらが合わせていかないといけないものですから、こちらが勉強していくということで、ディレクターとしては駆け出しですから、中村さんあるいは中川さんに合わせて教えていただき、勉強し身につけていくという、そういうことだったと思います。

—— その番組を通じて、ラジオ番組作りの、例えばノウハウなどというものは、やはり実地で勉強していかれたのでしょうか。

和田氏 そうですね、オン・ザ・ジョブ・トレーニングの典型的なことだと思うんですが、他の放送局で通じるかどうかは分からないのですが、「おはようパーソナリティ」という番組の中では、ベストのパフォーマンスになるように努力、日々していました。ですから、月～金は朝早くから割と夜遅くまで仕事をし、土曜日当時は「おはようパーソナリティ宮城まり子です」とか「おはようパーソナリティ藤川延子です」とか、そういう土曜日は別のパーソナリティーでやっていたから、日曜日しかないんですけれども。日曜日はほぼ泥のように寝るだけみたいな、遊びなし、全て仕事のみで打ち込んでみたい感覚でしたですね。今、そういう形で仕事をしろといったら、若い人はやってくれるかどうか分からないんですが、当時はそんな感覚でした。

【注】 * 「おはようパーソナリティ中村鋭一」

1971年4月～1977年3月、月～金 7:15～9:00

(1972年5月から7:15～9:30)

* 「おはようパーソナリティ道上洋三」

1977年3月～現在、月～金 7:15～9:30

(1989年4月から6:30～9:00)

—— 何の疑いもなくやっておられた。この番組は、かなりラジオから離れていた大人の聴取者を呼び戻したという風に言われていますが、何か具体的にそんな風にお感じになったことはありますか。

和田氏 そうですね、一つは公開放送をしたときに、最初に、北海道から取り寄せたものをその場でお安く売りますという北海道物産展みたいなことを朝日放送の正面玄関前でやったんですが、予想をはるかに上回る人が来て、こんなに大勢の人に聞かれているんだというような感じが実感として一つありました。その後、今の「おはようパーソナリティ道上洋三です」に至るまで、公開放送をするとラジオっていうのは本当に大勢の人が来てくれる。これは無料公開放送ということで、無料という要素も大きいと思います。ラジオで中村鋭一さんが何か言うと、「間違っている」とか、あるいは、「それはこういうことやで」とかいうお電話をいっぱいいただきます。当時は電話番号を公開しているわけではないのですが、いただいたお電話は、本当に鋭いといいますか、良く知っていらっしゃる、野に賢人ありとかってよく言っていました。リスナーの皆さんの中にはすごい人が大勢いらっしゃるといいます。それは当然のことで、いろいろな人生経験をされて、いろいろなことをしていらっしゃる方が大勢いる。ちょっとラジオで呼びかけたら大勢の人がすぐ反応してくれるというのは、やっぱり先ほど出野さんがおっしゃった、大人をラジオに呼び戻したという部分があるのかも分かりませんね。それが一つの例かも知れません。

——— そういう直接的な反応があると、やっぱりやっていらして楽しいでしょうね。

和田氏 そうですね。

——— ラジオはずっとやっていたかったという風なことをおっしゃっていましたが、やっぱりそのあたりですか。

<ラジオメディアとテレビメディアの違い>

和田氏 わがまますを許されるのであれば、ラジオの番組を作っていたい、出世なんか要らないという気持ちなんです。ラジオ番組を今でも作っているときが一番幸せっていいですか、というぐらいラジオはやや麻薬中毒的な要素があるのかも分かりません。ラジオとテレビの差でよく言われるんですが、永六輔さんが「テレビは街で、ラジオは村」と言ったり、比喩的に表現されたりしているんです。ラジオの送り手と受け手の関係とテレビの送り手と受け手の関係が違って。この場に西村大介さんとかテレビの大先輩がいらっしゃるのでなかなか言いにくいんですが、ラジオは生活の中で習慣的に聞いていただいている、そこで喋っている人間に対しての信頼感があって、送り手の方も聴取者との結び付きが非常にホットなんです。テレビは特にリモコンが出来てから、ピッピッピッと冷たく、「しょうもないこと言って」「面白いのないな」みたいなそういう感じですが。ラジオは本当に熱心に聞いていただける。ですからこれもよく言われますけど、ショッピングやると、テ

レビのほうは物を見せていろいろな説明をしてるのに、物が見えないラジオのほうがよく売れるとか、返品が少ないとかって言われています。それは送り手と受け手の関係がラジオは非常にホットだと。信頼感が非常に強いと。これもまたそういうことの一つの表れなんですけど、ABC ホールは基本的にテレビの公開録画用の仕事が多いので、ABC ホールのスタッフの人は、大抵テレビの仕事でやっていらっしゃる。「おはようパーソナリティ中村鋭一です」の公開放送を、ちょっと寒い時期だったんですが、したときに早くからお客さんが ABC ホールの外に並んでいるので寒いんじゃないかと。我々のほうからお客さん大勢並んでくれているよと、まだリハーサルがあったり、準備が整っていなかったりするんですけど、「早よ入ってもらおうか」ということをホールのスタッフの人に相談するんですね。すると、テレビだったら「客、早く入れよか」とか「客、入れるか」とかそういう言い方だけど、ラジオは「お客さんに早く入ってもらおう」みたいなその姿勢が違うと感心されたことがあります。送り手と受け手の関係でいうと、やっぱりラジオのほうが温かい。テレビのほうが大勢の人と関係があるので、その分、一人一人との関係が希薄になるのかも分からないですが。

——— と同時に今、やっぱりより近いところで仕事をし、聞いていただくという関係が成り立っているんでしょうね。非常に面白いエピソードだと思います。僕なんかはテレビの世界だけでしたので、それこそ「入っていただこう」という発想がなかったんじゃないかと思いますが、中村鋭一さんは、何年おやりになりましたか。

和田氏 6年だと思います。

——— そうですね。その後、今度はいまだに続いていらっしゃる道上洋三さんの世界になっていくわけですね。このパーソナリティーが交代するときというのは、中村さんが議員に出られるので、お辞めになったんですしたっけね。これは、仕方のないことであつたと思うんですけど、かなりもったいないなという感じがおありでしたか。

<ポスト「中村鋭一」に30代の「道上洋三」を起用>

和田氏 そうですね。スタッフは全員大反対して、中川大棟梁はチーフですから、中村さんと話をしたときのことを中村さん後日言っているのを聞きますと、冬だったらしくて、炭火でおもちを焼きながらさして話をしていて、炭火がジュっといったと。それは中川隆博さんの涙が炭に当たって落ちてると。中川大棟梁が泣いとんねんみたいな話があるんです。僕なんか若造ですから、中村さんに対しては、中村さんがラジオで喋ることの影響力和500人の議員の一人になって活動することの影響力和、どちらかという圧倒的にラジオで喋っているほうが影響力が大きい。

500分の1になってどうするんですかと。中村さんが政治家になりたいと言って、大勢のリスナーの皆さんと別れるってことが僕はもう情けないと言ったことがあります。しかし中村さんは、「同志社大学の弁論部のときから、赤絨毯を踏んで『総理、あなたは・・・』』と言うのが、これが夢なんやねん」と。そう言われるともう理屈も何もないんです。「もうやりたいねん」というようなことで辞められて、議員に出馬されて、落選されたということなんです。

【注】中村鋭一氏の議員活動

1980年参院選で初当選。通算、参議院議員2期、衆議院議員1期務める

—— 道上さんに代わられた頃からは、いわゆるディレクターとしてのお仕事だったのですか。チーフディレクター的な。

和田氏 中村鋭一さんが成功すると、当然、社としてはポスト中村鋭一を育てないといけない。そのときに道上洋三に白羽の矢といいますか。これをどこで養成するのかというので、1977年に中村鋭一さんが辞める2年前、中村さんが辞める兆候は全然なかったときに、土曜日の朝に7時15分から11時までという3時間45分の長時間の番組をスタートさせるんですね。そのパーソナリティーに道上洋三を起用する。「明日は日曜道上です」という番組なんですが、中川大棟梁が「會長、やってくれ」って。当時、僕のニックネームは會長だったんですが、20代半ばの僕がチーフで、30代前半の道上さんがパーソナリティーというので、土曜日、長時間やるんですね。これのときに当然、道上さんとはしょっちゅう、道上さんの車で送ってもらって、道上さんは伊丹で、僕は宝塚だったものですから同じ方向に帰りながら、途中のファミレスで珈琲飲んだり、喫茶店に入ったり。ときには話が尽きなくて、我が家まで送ってもらったり、それで家に入って話をしたりという、ずっと番組の改善を議論して。そういう話の中で、どうしても「中村さんの後は、道上さんですからね」と言う。道上さんは「それだけは絶対に嫌だ」と。中村さんみたいに大成功した人の後をやる、そんな損なくじはないと。それだけは断るという風なことを言っていたんですが、中村さんが実際に辞めちゃいますと、じゃあ次は道上さんしかないと。で、「おはようパーソナリティー道上洋三です」になると。一方で隣にいらっしゃる鈴木貞治さん担当の「フレッシュ9時半！キダ・タローです」というのがありまして、中村鋭一さんが海外旅行で長期お休みだったときに「おはようパーソナリティー キダタローです」というのを2週間ぐらいやるんですね。それを踏まえて9時半から11時まで「フレッシュ9時半！キダ・タローです」というのが出来ました。これもキダさんは中村さんの後の番組のパーソナリティーとしてやってらっしゃるんで、キダさんが中村さんの時間帯っていうことはなくて、中村鋭一さんの時間帯からキダさんの時間帯までの土曜版を長時間やっていた道上洋

三さんに、中村さんの後をやってもらうしかないということでした。

——— そうですか。やっぱりアナウンサーとしては辛いだろうな。

和田氏 出野さん、やるかも分らん。

——— もしか自分だったらと思っちゃいますね。道上さんの気持ちはよく分かります。でもやっぱり、中村鋭一さんとはまた違う喋りですし、それからカラーでも、やっぱり阪神タイガースファンというキーワードをずっと引き継がれているんですよね。

<阪神タイガースの歌「六甲おろし」誕生秘話>

和田氏 そうですね。最初に中村鋭一さんで阪神タイガースというのをやり始めたときは、連日抗議のお電話をいただいて、公正中立であるべき電波で、一つの球団に偏って放送することはとんでもないことだという、毎日そういう抗議のお電話を聞く、これが仕事の一部。本当に大勢の人からお叱りのお電話をいただきました。ところがそれが1年2年ぐらいですか、中村さんがあるときから「阪神タイガースの歌」があるはずだと、当時レコード室を探したら、若山彰さんが歌っている「阪神タイガースの歌」というのがありまして、コロムビアから出ていて廃盤になっていたんですが、古関裕而さんの作曲でした。これをかける。そのうち巨人戦に勝ったら生で歌う。巨人戦に勝つと3コーラス歌うと、段々、エスカレートしていくわけです。それで曲名も、正式タイトルは「阪神タイガースの歌」なんですけど、歌いだしの文句が「六甲おろし」なので、中村さんは「六甲おろし」と言う。お叱りのお電話をいっぱいいただいていた状態から、今は甲子園球場で公式に流れる歌として「六甲おろし」が流れているということなんです。タイトルも「阪神タイガースの歌」でなくて「六甲おろし」というのが一般化している。しかも道上洋三も昔からの阪神ファンで、「阪神ファンです」と言うのと、また鋭ちゃんの真似しているとか、二番煎じとか言われるのに、抵抗がありました。阪神タイガースをどうするのか。しかし阪神タイガース好きだから、これでいくしかないねみたいな状態で、いろいろなものを中村さんから継いでいくんです。3年間は後輩の僕が言うのも何なんですけど、道上さんはやっぱり辛かったですね。ということは、その前2年間やっていますから、5年間は中村鋭一さんという非常に大きな存在と我々はどうしても比較をしてしまうのです。ただ、僕は番組担当者として恵まれていたと思うのは「おはようパーソナリティ」も「道上洋三です」もそんなに簡単にやめる番組ではない。その次テレビに行って作るようになった「サンデープロジェクト」もテレビ朝日・ABCの編成がやると決めて、枠を作っていて、どんなに視聴率が悪くっても簡単にやめない。「和田君、これもう5年も10年もやるからそのつもりでいけ」みたいなこと言

われて、そういう意味合いで言うと、小手先で目先のレーティングとか聴取率・視聴率を上げようと小細工を弄さなくていい。こう本筋を、王道を歩んでいくということで日々番組を作っていたということは、非常に恵まれていたと思うんですね。道上さんの番組も、僕から見れば合格点になかなか達しない、もう生意気なんですけど、そういう思いでいました。3年で僕が辞めた後、「日産ミュージックギャラリー ポップ対歌謡曲」とか「ヤングリクエスト」みたいに一般番組に行くんですけど、道上さんがのびのびとやって良くなったんですね。4年目から道上さん、非常に良くなったと思います。口幅ったいですが。

【注】「日産ミュージックギャラリー ポップ対歌謡曲」

1967年4月～1995年10月、月～土 13:30～14:00

—— まだちょっと足りないなという風に思われたのはどのあたりだったんでしょうか。道上さんもやっぱり野球をずっとやっていらっしやいましたよね。

和田氏 はい。スポーツマンで音楽もやっていたし、大学時代から放送のお仕事もやっていたし、本当に、入社して早々に「ABCヤングリクエスト」という番組を週2日担当していました。

—— 非常に優秀なアナウンサーで、プロフェッショナルです。

和田氏 エースで。「空からこんにちは」という番組も、番組開発の「ヤングリクエスト」「空からこんにちは」「パーソナリティ」というラジオの世界での開発された新しいものを次々担当して行って、そこで成功しているということと言えますと、ラジオ放送史上優れた人だと思うので、あの頃、道上さんの力がまだまだだと思っていたのは僕の若気の至りだったと思いますね。そんな失礼な。

—— 多分何かあったんだろうと思いますが、これからいくつかのラジオの番組をおやりになった後、いよいよ1987年からですか、夕方のテレビニュースの編集長をされます。このことは、このあとの「サンデープロジェクト」の立ち上げとかに随分関わってきたのかなという感じがしますが、いかがですか。

<突然 テレビのニュースデスクへ>

和田氏 そうですね。僕はラジオ制作から異動になったら会社を辞めると当時公言していたんですが、40歳で子供が二人という状態で報道に行けと言われて、辞めるわけにもいかず、報道に40歳になって行って、そこでもう40歳ですから駆け出しの記

者のようなことができなくて、デスクという、取材経験もないのにデスクをやらされるという、これもなかなか非常に厳しかったですね。ABCの規模でほぼ駐在カメラマンとか、編集の人とか入れると100人がデスクの判断を求めるわけですよ。これはボツにするのか、これは中継車を出すのか、撮って出しでいくからオートバイをつけて行けとか、指示を出すとか判断する。これはものすごく苛酷な仕事で、そのデスクをやった後に夕方ニュースが。しかもこれが「ニュースシャトル」という、当時ネットニュースというのが7時20分のNHKニュースが終わった後のゴールデンにいったために、6時台のニュースゾーンを55分間すべてローカルでもやるということだった。これも非常に苛酷で、55分間、ニュースをローカルだけで埋めるというのが、今考えてもぞっとするようなそんな仕事ですが、それをやって、とりあえず日々凌いでいくぐらいのことだったんです。それを経たから「サンデープロジェクト」が出来たのかな。当時、僕はラジオをやってローカルのニュースをやっていましたから、テレビの「サンデープロジェクト」についても、系列局の名前さえ知らない。ネットワークについて無知という状態で、いきなり系列の報道局長会とかにあって「サンデープロジェクト」という新しい番組をやりますが、ニュース素材をよろしくみたいなことを言う羽目になるんです。系列局の24局、当時は24も無かったかも分かりませんが、名前すら知らないという状態でこの番組を始めます。系列のことはともかく、とりあえず、ニュース系について2年間やったということで、かろうじて「サンプロ」のスタッフが出来たかなと思います。

—— 私も実は45歳でアナウンサーから報道に異動になりましたね。その日から、取材に行くのかボツにするのか、それから泊まりがありますので、泊まりのときの取材に行くかどうかという判断もしなくちゃいけない。それを記者が皆、待っているんですよ。見ているんですよ。この人どうするんだろうとかね。昨日までアナウンサーだったやつがいきなりやって来て、本当に胃が痛くなりました。もうちょっと若いときでしたら大丈夫だったんですけどもね。さて、「サンデープロジェクト」の誕生のきっかけというか、その当時の系列の中でのABCの位置とか、テレビ朝日との位置関係、力関係というのはどうだったのですか。

<「サンデープロジェクト」の編集長に 共同制作のキー局テレビ朝日に乗り込む>

和田氏 多分、きっかけは日曜に「サンデーモーニング」(TBS系)という成功例があり、「笑っていいとも!増刊号」(フジテレビ系)が10時台にあり、日本テレビが「The・サンデー」というのを「サンデーモーニング」の裏で放送している。当社は30分単位でやっているということで、東阪の編成が当時はABCが高岸さん、テレビ朝日は小田久(小田久栄門)さん。そこで東阪の編成が話し合ってワイド化しようと。テレビ朝日のネット枠30分とABC発ネット枠30分とローカルゾーン45分を合わ

せて、1時間45分の枠が出来るので、これでネット番組を作ろうということになった。セールス的には11時台はローカルゾーンにしてみたいなという多分、編成主導でそういう枠組みの話が進んだ。作る場所は報道にしようということで、ABCは報道に。取材記者一つ出来ていない僕が、そのABCの責任者として起用され、だからテレビ朝日は小田久さんが、編成局長がそれまで「ニュースステーション」等で一緒にやっていた早河さんが、現会長ですが、早河さんが報道センター長で、小田久さんが早河さんに新しい日曜のこの枠を作るから報道でよろしくという話をしたんです。僕の聞いているのでは、早河さんが初めて小田久さんに背いて受けなかったと。そうするとテレビ朝日は報道ではなくて、情報局に行っちゃうんですね。ABCは報道局、テレビ朝日は情報局と、報道局同士だったら日頃のお付き合いがあるので、顔も分かると。ところがお互い全然見知らぬ同士が1989年4月2日に番組（「サンデープロジェクト」日曜日、午前10時から1時間45分）がスタートすることになる、その2か月前の2月2日に初めて顔合わせをするんですね。1時間45分のネット番組を立ち上げ、スタートさせるというのは、当時のテレビの人からすると極めて準備期間が短いと。しかも東阪共同制作で初対面同士ということなので、かなり厳しい条件だったんです。そうなる僕は基本的にラジオ番組を作っていましたから、ラジオはそんな条件で作るのは別に大したことではないので、期間が短いとも、大変だとも思わず、それは全然問題がなかったんですね。それで司会をABCは誰にするかというときに、ABCから（島田）紳助さんという名前を出して、テレビ朝日がすんなりとOKして、紳助さんに話に行っただけです。ところが、紳助さんに断られるんです。そのときに初めて、紳助さんぐらいのバリューの人に1か月前ぐらいにレギュラーの話をしに行くというのはやっぱり失礼だったんだと、そこで初めて思い知りました。ラジオだったらそんなことは別にいいんじゃないかなと思っていました。紳助さんの断り方が、「今の僕の方では出来ません。2年後に来てください」という。僕のほうが「2年後にこんないい仕事があるかどうかは分かりませんよ」と返したら、紳助さんが「分かりました」と言って受けてくれたんですよ。

——なるほど、口説き文句もいろいろあるんですね。

和田氏 1年経って、通常はギャラアップをしないといけないんですが、10%ぐらい上げないといけないかなと思って、当時、吉本の常務だった木村さんにギャラ交渉ということで話をしたら、木村さんのほうから「僕もこんな初めてなんですけれどもね、紳助がギャラ下げてくれと言うんです。僕の方では今番組の役に立っていないから、ギャラ下げてくれと言うんで、紳助が言うんで、しょうがないんですわ」という話だったんですね。それともう一つのエピソードは、実際やってみると、自分が

政治のこととか、社会のことをあまり知らないというから、中学高校の社会科の教科書を買ってきて勉強する。当時、五反田のマンションにいて、若いタレントなんか10人ぐらい出入りしていて、紳助さんが食事を作ったりしていたのですが。そこに集まっている10人ぐらいの若手のタレントに紳助さんが社会科の問題を作って、答えさせてというようなことをゲーム感覚でやっていて、そこから番組の企画を作って、「これ和田さんところでやらへんかったら、読売テレビに持って行きたいんですけども」。それで実現したのが「サルでも分かるニュース」という番組で、何年間かはやったと思います。

—— 当初、「サンデープロジェクト」の出演者というのは、関西の人たちが多かったんですよ。

和田氏 そうですね。

—— それと同時に、いわゆる後々、田原総一朗さんがイメージ（キャラクター）になるまでは、割と柔らかい感じの番組だったようですね。

<国際的事件相次ぎ 「サンデープロジェクト」報道色強める>

和田氏 そうですね。番組作る前は、硬い番組ではなく、テレビ朝日が情報局ということもあり、情報系の番組として、アイドル・インタビューコーナーも作ろうというんで、1回目がテニスの宮城ナナ、2回目が深津絵里、3回目は誰やったかな、番組が始まる1週間前ぐらいに、女性アイドル3人のブックイングを決めていたんです。ところが、番組のカラーがどんどん硬めのほうにいつているというので、このコーナー入ると浮くよねということになって、お断りしに行くんです。2か月しかないので、その間にテレ朝とABCで話をしているうちに、番組のカラーが少し当初から変わっていったというようなことがありますね。「田原コーナー」も最初のゲストがハマコーさん（浜田幸一 元衆議院議員、1928～2012年）ですから、純粹の政治というよりも、ややバラエティーっぽい要素もあって。テレ朝のプロデューサーも「田原コーナー」はプロレスみたいなものだから、プロレスのセットでやらどうかねみたいなことを言っていて。ところが、やっていくうちに段々、そうではなくなって、「朝生」（「朝まで生テレビ」土曜日深夜から5時間30分）という「サンプロ」の前にスタートしていた番組は、深夜に長時間もたせないといけないということで、ある程度、プロレス的要素といいますか、が必要だったんですけども。「サンプロ」は日曜の午前帯ですので、クオリティーを求めるといって、「朝生」にあるエンターテインメント性というのを外して、クオリティーを純粹報道でいこうということに。6月に天安門事件が起こり、消費税問題があり、東西冷

戦構造が崩れていくとか、湾岸危機から湾岸戦争と世の中が割と激動していったもんですから、「田原コーナー」2 段積みとかですね、そういうことになっていて、当初あった A-SAT 中継のコーナーをやめて、スポーツのコーナーもやめてという。番組が始まってからも、どんどん番組の中身は変わっていった。それは世の中の動きに合わせて、そうになっていってしまったわけです。

——— ただ、他の系列では、準キーとキーが一緒になって、そういう番組を作るという例はまず無いんだろうと思うんですね。それで、さっきおっしゃった報道局と情報局の関係で、当初から上手く歯車ってというのは噛み合っていたんですか。和田さんは、どういう位置だったんですか。

< “ABC はもう一つのキー局” 共同制作の難しさ感じた 4 年間 >

和田氏 これは当然、テレビ朝日にはキー局のメンツがありますから。特にテレ朝のプロデューサーは「ABC なんかには負られるか」という、多分そういう気合いで来ていますし、ABC の編成からすると、「当系列は、ABC はもう一つのキー局だ」と。これは業務契約みたいなのは、ABC とテレビ朝日と系列局とで結んでいるということだと思いますと、他の系列局と違って ABC はもう一つのキー局という位置付けなんです。特に編成はその意識が強いですから、「ABC はもう一つのキー局なんだから」みたいな意識でいる。ところが現場にいる僕としては、そういう「もう一つのキー局だから」という意識でテレ朝に張り合って、テレ朝のメンツを潰すようなことになれば、番組としては成功しないので、とりあえず当面は僕より年上だし、そのテレ朝のプロデューサーを立てますと。スタッフ会議はこういう長方形のテーブルで、テレ朝のプロデューサーと僕が議長席に座ってスタッフが残る三辺に座るという、30 人ぐらいですね。これで 1 年間やっていたんですが、テレビ朝日のプロデューサーが交代して、二代目のプロデューサーはスタッフの側に座られた、そうすると、僕一人で議長席に座って、周りは ABC のスタッフが一人二人しかいなくて、あとはテレ朝のスタッフとプロダクションの人とか。ということで、このテレ朝のプロデューサーは甘んじてしまったといえますか。

——— 一歩引いちゃった。

和田氏 一歩引いたんです。ですから「サンプロ」の会議は、僕は 4 年いましたから、残り 3 年間は僕がリードするみたいなことになったんです、結果的には。それで結果、上手くいったんで良かったんですが、テレ朝は、二人目のプロデューサーはそんなキー局のメンツとかそんなことではなくということやられたんですね。その人も僕より年上で、キャリアも、情報系のキャリアが豊富な人だったんですけれど

も、結果そんなことになって。しかも、テレ朝の中で二つの派が分かれていまして。こっち派と飲んだり、あっち派と飲んだりというようなことをして、両方とも仲良くやっていたんで良かったんですが、お互いに相手の悪口を言うという感じで。でも最終的にはうまくいったんですけれども。

—— ちょっと戻りますが、当初これだけ、紳助さんとか、関西色が強いキャストでね、テレビ朝日がよく「ああ、それでやりましょう」という話になったんだなと思っています。

<コメンテーター田原総一郎氏との関係は>

和田氏 これは簡単な理由で、田原総一郎さん自身は滋賀県の出身で、テレビ朝日が田原総一郎を使うということを条件にしてくれということで、これを当社がのんで、田原総一郎さんに「コメンテーター、どうしましょうか」と相談したときに、高坂正堯、都はるみという名前が出てきたんですね。その理屈は右派が必要だが。右の論客でいうと高坂がいいねと言うのが田原さん。もう一人は普通のおばさんになっている都はるみがいいんじゃないと。これは単純に田原総一郎さんが都はるみのファンだったということで、都はるみさんを口説きに行って、都はるみさん、当時、いらっしゃった中村一好さん（所属事務所代表）は前向きに受けようと言い、都はるみさんは簡単にお受けできないとか言って、目の前で二人が喧嘩になるわけですが、後日受けますということになったんです。結果的には1989年6月に美空ひばりさんが亡くなったときに、都はるみさんが10分喋らせてくださいと言ってきて、結果的には30～40分、1人で喋り続けて、それが非常に大きな話題になるんですね。日本レコード大賞、日本歌謡大賞を「北の宿から」で取れるか、取れないかというときに、北朝鮮系の人に日本レコード大賞とかっていう、「日本」って付くものは与えられないとかいうことが当時は言われていて、そのことで美空ひばりさんの家でひばりさんに相談して、コークハイを47杯飲んだけど全く酔わなかったみたいなの、そういうような話をされたんです。そういうことを経て、都はるみさん、1年間コメンテーターをやって、やっぱり歌手に戻ると言って歌手に。高坂先生は右の論客ということで、田原さんは起用しようということだったんですが、非常にバランスが取れている方で。大谷昭宏さんとか高野孟さんとか、社会派の Reporter 大田区民会館で。とか、そういうのが非常に高坂先生はお気に入り。右というよりは非常に柔軟な方でしたね。

—— 衛星中継が使えるようになった頃なんだそうですね。

和田氏 そうです。ですから当初、セットにA-SAT (SNG システム)、衛星を入れていたん

です。それは当系列のみが先に上がって、他の3系列は宇宙通信でしたが、当初、失敗に次ぐ失敗でなかなか立ち上がらない。他系列をリードして衛星中継が出来るというので、それを謳い文句に番組をやったんです。ですから、当初、これ見よがしにこんなところから中継出来るかというようなところからやりましたね。離島とか山奥とか。

—— 典型的に覚えていらっしゃる、これ見よがしはどこだったんですか。

和田氏 甌島っていうんですが、鹿児島島の孤島みたいのところとか、北海道のなんとかの滝という、忘れましたが。中継機材をばらして、スタッフが人力で担ぎ上げて行って、そこから衛星生中継しました。それまでの技術では絶対に出来ないところでした。

—— SNG ですか。

和田氏 SNG (Satellite News Gathering、ニュースなど放送番組の素材収集システム) です。

—— 和田さんの言葉を借りると、あるいは番組でそういう風に言われていたのかもしれませんが、

和田氏 世の中が激動して行って、一番は湾岸危機から湾岸戦争、ベルリンの壁の崩壊という、そこですね。ちょうど湾岸戦争のときは、番組のほぼすべてを湾岸戦争の情報と分析に。たまたま 1991 年の 1 月でしたか、番組やっている途中で地上戦に突入するんですね。これは系列の ANN 特番、報道特番になっていくんです。当時、報道センター長だった早河さん、現会長が来られて、僕は常にフロアのところの田原さんなんかの横にいましたから、和田君このままのメンバーで ANN 特番、ANN の報道特番にいかしてくれないかと。こちらは了解しましたと。皆さんに、「すみません、放送時間延長で。その後は特番でやります」ということで、当時の論客の皆さんとか中継体制とかはすべて、その後、2 時間か 3 時間かは忘れましたが延長でやったことがあるんですよ。ですから、番組のスタッフやコメンテーターとか、(番組の) 形そのまんまで系列の報道特番になっちゃったというぐらいに硬めの内容になっていったんですね。

—— と同時に、系列の中でその番組自体が力を持ってきたといいますか、認められてきたということも一つあるでしょうね。

和田氏 そうですね。そういう状態ですので、視聴率的にもかなり高く、軒並み 10%を超えてくるみたいな、そういう時期がありましたから。系列の中では、非常に評価が高かったかなと思います。

—— プロデューサー、編集長としては、番組の立ち上げのときから、番組に関わりつつ、番組の方向性っていいですか、どんな風が変わっていったらいいか、変えていくべきであるかということ、脇から第三者的にずっと見ておられる必要があったわけでしょうね、きっと。

和田氏 そうですね。そんなゆとりはなく、渦中の中でのた打ち回るような状況だったんですけれども。世の中の出来事に振り回されながら、それに対応していくというような感じですね。

—— 上手く編集していったものだなと思ってね。田原総一郎さんの扱いというのは、どんどん変わっていきましたですね。田原さんとは随分長くお付き合いをされたようなんですけれども。

和田氏 そうですね。番組（の担当が）終わって、これで日曜日から解放されると思って家にいたら、「サンプロ」終わりで電話がかかってきまして、田原さんから今日はどうだったといきなり聞かれて、えっ田原さんに番組のことを喋らないといけないのかと思って。とりあえず見た内容について喋って、翌週も翌々週も番組が終わると田原さんから電話があって、これはノートを取りながら見ないといけないと思って、「サンプロ」は日曜日にずっとノートを取りながら。良かったところを言うだけではなくて、少しは批判もしないといけないかなと思いながら、いいところはかなり多めに、批判するところは遠慮しながらということが、「サンプロ」が終わるまでずっと続きます。日曜日は、ほぼ半日、それで潰れるというような状態でした。

—— これは何年間おやりになったんですか。

和田氏 21年ぐらいじゃないですか。「サンプロ」は21年か22年。

—— 和田さんが関わられたのは。

和田氏 4年間です

—— 立ち上がりから激動の4年間でしたね。体は大丈夫だったんですか。

和田氏 単身赴任でしたから、最終4年目に腰痛で倒れて入院するというような。夏場に風呂上りにクーラーをかけて扇風機もかけながら「ニュースステーション」を見ながら、うたた寝をして、夜中の2時ぐらいに目が覚めたときに体が冷え切って。それで激痛で身動き出来ない状態で、本当に焼け火箸が腰に刺さったみたいな状態で、それで救急車呼ぼうにも電話のところまで行けないという。当時、携帯電話なんかありませんので、そこに汗流しながら20分かけて行って、今度、救急車が来て、そのドアを開けられないとあって、本当に身動き出来ない状態で入院したということはありませんね。入院して、スタッフがテレビを持って来て、電話を取り付けて、「和田さん、これで仕事出来ますから」とか。

—— そこでも仕事しろという。

和田氏 電話が付いて、30分くらいすると電話が鳴って。田原さんからで、「今週だけどね」と。見舞いの言葉も無いのかという。

—— 田原さんから電話がかかってくる状態は何年ぐらい続きましたか。

和田氏 最後までですから。

—— 最後までですか。じゃあ、あと辞められて17年間ずっと。

和田氏 ずっとです。

—— ああ、そうですか。

—— それは必ず番組を見ていなくちゃいけないということですよ。

和田氏 そうです。

—— でも、一番そういう意味では頼りにしておられたのかな。

和田氏 なんでそういう関係になったのかとも思ったんですけども。一度田原さんと大喧嘩したことがあります。番組を守るためにというつもりだったんですが、当時ソ連が崩壊していくというプロセスのときに、番組としてもこれは大きなテーマ

なので、番組にソ連の数次旅券を持たせて、即いつでも行けるようにして、番組のコメンテーターとして中村逸郎（政治学者）っていう人もいつでも行けるようにし、下斗米伸夫先生（法政大学教授）にも行ってもらいと。そのときは下斗米伸夫先生にモスクワに行ってもらっていて、オープニングはこういう形でやりますとか段取りして、放送始まる30分前ぐらいに田原さんがこれやめよう、飛ばそうみたいなことを言ったんで、それは出来ませんと。これは「田原コーナー」ではないので、このオープニングのところは予定通りやってくださいと。田原さんは烈火のごとく怒りだして、放送30分前ですから、スタッフはその準備しながらこっちを聞いているわけです。どうなるかなと。先ほどのテレビ朝日のプロデューサーは、そこで新聞を読んでいらっしやって、見て見ぬふりの状態だったんですが。これはもう「田原コーナー」じゃないんで、段取りを守ってスタッフの段取り良くやってもらわないと困ると反論して。田原さんも反論して。お互いに言いつのってという、そういう大喧嘩をして。次は本番前、生放送でやりますから、生放送でカメラの前にいるのは田原総一郎氏であって、僕はカメラのこちら側にいますから、これはこの精神状態のまま入ってはいけないと思って。他のスタッフがいるところで田原さんにお詫びするみたいなことはやっぱりやりたくない。たまたま田原さんと二人だけで廊下でバタッと会ったんで、即、「田原さん、さっきは言い過ぎました。すみませんでした」とか言って謝って。そしたら田原さんも「いや、こちらこそ」みたいなことでお互いに本番前には水に流して本番に入ったんです。本番終わったら、いつもはそういうことないんですけども、田原さんがずっと僕のところに来て、「飯行こう」とか言って、他のスタッフとか他のゲストとかほったらかしにして二人で食事に行ったということがあるんですね。そのとき以来、さらに一段と田原さんとの信頼関係が強くなったように思いますね。やっぱりお互いにぶつかり合っただけで、信頼関係が増したのかなと思いますね。

—— 一つ伺っておきたいのですが、田原さんってどういう、僕らはなんとなく画面で見ているとですね、こういつも攻撃的な人柄みたいな感じが受けるんですけども。普段はどんな人なんですか。

和田氏 うーん、これも難しい。

—— やっぱりずっと何かを考えていらっしやるんですか。

和田氏 まず、よく取材をする人です。よく言っていたのが、「和田さん、僕はね、今、この年になっても、靴底を減らしながら歩き回って取材しているんですよ」と言っていました。ですから、霞が関のあっちこっちに常に情報源といますか、その人た

ちを訪ねて、一番新しい情報を得るようにしているんだと。そういうことがあったものですから、僕はずっとスタッフルームにいて、日曜日も休みもなく、ずっと田原さんが、当時携帯がなかったですから、プロデューサーはスタッフルームにいくちゃだめだよというのが田原さんの口癖で、その代わり、そこにいと、1日に多い時で5回ぐらい田原さんから電話があつて、「さっき誰それに会ったよ。こんなことを言っていたよ」みたいな情報を教えてくれるんですよね。という具合に、田原さんは常に靴底を減らして、情報を取材していた。今もそれは変わらないということと、もう一つ田原さんが言っていたのは、「政治家がなぜ僕を信用してくれていると思うか」と。「それは政治哲学があるからだよ」と。その政治哲学を政治家は信用してくれている、だから政治家にぼろくそに言っても彼らは受け入れてくれるんだと。

先ほど出野さんのお話で言うと、常に戦闘態勢にいて、ちょっとしたことですぐパッとキレそうになる。立花隆さんが田中角栄の研究かな、本を出版されて東京で出版記念パーティーがあつて、有名人がいっぱい来るようなところでした。割と賑わっていて、和やかにやっていたんですが、遅れて会半ばに田原総一郎氏が入ってきて、当時、僕は全く田原さんを知らない。まだ若いときの田原さんなんですが、僕は「おはようパーソナリティ中村鋭一です」をやっていたときに、立花さんに出てもらって、その立花さんの出版記念会に行ったというところでまだまだ若い頃です。本当に入ってきた途端に、そこら中の和やかにいる人たちに宣戦布告するみたいな面構えで、この人だけなんか違和感が、トーンが違うなという感じがしました。常に誰かに挑みかかるみたいな人だと思いますね。

—— 営業政策だったんですよね、彼のね。

—— 私的に戦闘的な人かどうか、僕はちょっと違うような。よく分かりません。読売チャンネルの頃から付き合いがありますので。

—— この4年間ってというのは、かなりやりきったという感じですか。

和田氏 そうですね。満足してはいけないんですが、単身赴任で4年間はしんどくて、もう限界かなというぐらいの感じでした。まあ最後に腰痛になったこともありまして、とりあえずロープに逃れるみたいな、出来ることならば、やり続けたい。それは報道っていうのは、大阪は本当に社会部で事件を切った張ったみたいなのがどうしてもメインなんですが、東京では、政治の仕事がやれる。東京で仕事をやっている非常に貴重な経験かなと。それと東京のスタッフというのは、常に日本全国を見て、世界中を見ていますから、例えば1年目のときにサンフランシスコ大地震が起こ

るんですよ。そうすると、テレ朝の若手つかまえて、すぐサンフランシスコに行ってくれと指示。とにかく彼はパスポートを取りに帰って、バッグ抱えてその日のうちにサンフランシスコに飛んで行く、取材をする、回線を押さえるみたいなことを一人でやるんですね。常にどこで何が起こっても、それについてすぐ理解できるようになるだけのベースのところはやっているし、例えば英会話を習いに行くなんかは、プライベートで行っているんですね。大阪に帰ってくると、そこが緩いといえますか、東京で仕事をやるっていうのが刺激を受けるといえますか。いろいろな面で、こういう仕事をやっていくには東京でやっているのがいいなと思うんですが、なにしろ腰痛で4年単身赴任でしたので。

——— でも、これまでの放送人としての生活の中で非常に大きな部分を占めておられるんじゃないかなという気がいたします。と同時に、非常に貴重な時間であったんでしょうね。

和田氏 非常に恵まれたと思いますし、ABC の人間でこの恵まれた仕事はいろいろな人が経験したほうがいいという風に思っ。それが良かったのではないかと思いますね。

——— 前半ラジオ、後半テレビのお話を伺いましたが、両方の今後について、まずはラジオの今後。さっきおっしゃったみたいに、いろいろと時間帯によって聞く人が変わってますし、局によっても聞く層が違いますよね。前にここに出させていただきました、FM802 の栗花落社長なんかは、若い人たちを中心に、40 歳ぐらいまでの人たちを中心にステーションを、それから番組を組み立てるんだということをおっしゃっていました。ラジオというのは昔のように全部の人に聞いてもらうというんじゃなくて、かなりターゲットを決めて生き残っていつているような気がします。

<これからのラジオは AM から FM そしてインターネットラジオ>

和田氏 そうですね。その中身の問題が一つ大きいんです。ABC も今、番組をかなり変えていって、30代40代をターゲットにした中身に変えていつているんです。それは、スポンサーニーズということもあるんですが、メディアとして AM が都心部でかなり音質が悪くなっている。それをカバーする意味でも、radiko.jp というインターネットで聞くことが出来るラジオが出てきて、これに接する人は若い世代が多い。これから AM はさらにデジタル機器の普及に伴って音質は悪くなる。でも radiko.jp は増えていく。すると、これからの時代をにらむと、radiko.jp の聴取者ということをしていくのがいいのではないかとということがあると思うんですね。もう一つは、今、制度が出来つつあるんですが、FM 補完放送というので、AM 局は

国土強靱化、放送ネットワークの強靱化の一環として、FM 放送を合わせてやる。そうすると、AM よりは音質が良いということもあって、ターゲットも少し若いということで、ターゲットとしても若くしよう。一方で、今、レーティング調査の対象が 69 歳が上限なんで、ABC だって「おはようパーソナリティ道上洋三です」を聞いていた人なんか、今どんどん 70 歳を超えていっている。するとレーティングの対象外になっちゃうんですが、これを 69 歳以上もレーティングの対象にしましょうという動きがあります。今度は実験的にそういうことをやるというがあるので、高齢者の方もレーティングの対象にするという動きもありながら、radiko.jp と FM 補完放送ということでいうと、やはり若い層・音楽というのが中身としても大事なかなと思います。

——— 高齢者に対して、テレビというのは優しくないんじゃないかなというのが一つの大きな課題というか、宿題としてあって、多分、ラジオもそれがいえるのかなという気もします。ラジオと高齢者というのは、朝、69 歳までの方が聞いていらっしゃるか。「おはようパーソナリティ」をいくつぐらいの方が聞いていらっしゃるのか。昼間の奥様方の時間帯、夜は若者たちの。今ここに集まっている我々の年配になりますと、「ラジオ深夜便」をレギュラーで聞いていらっしゃる方も、かなり深い時間帯に聞いていらっしゃると思います。民間放送として、高齢者に対してはどんな風なラジオ番組の提供をしていくとか、何かありますか。あるいは、かなり聞いていないだろうというような見通しなんでしょうか。

<高齢者と若い層の棲み分け メディアの課題>

和田氏 そうですね。民放としては営業重視、スポンサーの志向というのと、若い層を取りに行くというのが重要といたしますか。テレビでも関西テレビ、フジテレビ系列が若い層を多く取っているのですから、スポットの単価が高いとかですね、そういうことがあるものですから、どうしても F1, M1 志向ということになるんです。しかし、やや、F1, M1 志向というのも見直しの機運もあると。実際にお金を持っているのは高齢者といえますか、団塊の世代。団塊の世代がリタイヤしていく、実はゆとりがあると言われていています。かつては、若い層は CM によって商品を買うけれども、上の世代は買う商品が決まっているから、コマーシャルによって動かないと。そういうことで、高齢者はテレビの CM の対象として価値が高くないみたいなことだったんですが、団塊の世代がどんどん入ってくると、その人たちは、やはり CM で動くのではないかと。トレンドに対して敏感ということである、そういう層を商売として重要な層に位置付けていかないといけないと思うんです。そこは電通はじめ、広告代理店、あるいはクライアントサイドと歩調を合わせていかないと、放送局が独走しても結果につながらないものですから。特にラジオは通販系が多くて、これ

のアクチュアルといいますか、実際にどれだけ売れたかというようなことで、スポンサーサイドが取捨選択するものです。そこで健康志向の商品、グルコサミン、コンドロイチンとか、そういうものがどれだけ売れるかということでいうと、高齢者の反応がいいようなことも考えていかないといけない。一方で、先ほど申し上げた radiko.jp みたいなものが今後主流になってくる可能性があるとしたら、若い層をつかんでおかないといけない。ここは若い層にする、ここは高齢者にするというような棲み分けをどうするかということだと思っんですね。

——— これは各局とも非常に大きな課題でしょう、きっとね。打ち合わせにお伺いしたとき、冒頭、この例会に出ていただきませんかという話をしたところ、「長く現場にいたので、ラジオ・テレビに関わらず、後輩に何かを伝えることが出来れば」という風におっしゃっていただいたんですね。ここにおられる方というのは、多分和田さんよりも年配の方、先輩の方々だろうと思いますが、後輩に対して、どんな風なことを伝えておきたいなあということが何かおありですか。

<若い放送人に伝えておきたいこと>

和田氏 そうですね。今、出野さんに言われて、そんな生意気なことを言ったのかと。日頃、会社では常にそういうことを念頭に若い人に接していますが、放送局を越えてということである、そんな口幅ったいことを言えるようなことではないし。

——— じゃあ、ABCの後輩の方に。さっきおっしゃった、その番組に対して真摯に向き合うというようなことが一つ大きいことでしょうね。

和田氏 そうですね。常にそこでベストを尽くすしか、次は開けないので、腐ることがない、人事異動のときに。僕は人事異動のときに希望を一度も言ったことがないんですが、会社が行けと言ったところは、自分にとって一番楽しいところといいますか、そこでベストを尽くす。それが次に展開するという風にしか思っていないものから、四の五の言わずにそこが自分の天国だと思って頑張ると。これも中村鋭一さんから聞いた言葉なんですが、「終わったことは、結果、すべて良かったことだ」と。その後、僕が付け足すんですけども、「人生いつも途中経過なんで、今、これまでがあって、次があると。それぞれのところでベストを尽くすことが自分の人生を豊かにすることだ」という風に思うものですから、えり好みとかそういうことではなく、どこでもやってみたらその仕事は面白いと。それが会社に貢献し、世の中に貢献し、時代に貢献しということになれば、それは本望だと。たまたま僕は、「おはようパーソナリティ」とか「サンデープロジェクト」とか番組に恵まれました。それはたまたまなんですけど、これまでのところ、一生懸命やっていたことがそ

こにつながっていった。その場に行ったときに、一生懸命やったことが、それを長く続けることにつながってという風に思うんですね。

——なるほど。最後の質問はですね、現役の副社長さんですのでお伺いいたしました。今までの方にはこういう質問をしたことがありません。

和田氏 十分な答えが出来ずに申し訳ありません。

——「人生いつも途中経過だ」というのはいい言葉だと思います。僕もちょっとどこかで使わせていただこうと思います。世話人の方で、質問者の方で考え付きました質問というのは、だいたいこのあたりかなあという風に思います。あとは皆様方で、あれが聞きたいなということがありましたら。

——この間、MBSの後輩と話をしていましたら、メディアの役割というのは、言ってみりゃ、権力に対するチェック機能だという風に思って社に入ったのに最近、気が付いてみたら、権力のほうが信頼されていて、メディアの方が胡散臭い目で見られている。そういう気がする。いったい我々はどこで間違っただろうと言っている後輩がいましたね。なるほどと思いました。つまりメディアが胡散臭いというか、おかしいと、特にネットの世界ではそんな風に見られているという現実をお感じになることがありますか。

<「現実の皮を一枚めくった所にある本当の姿えぐり出す」 メディアの仕事>

和田氏 メディアが胡散臭い、権力が正しいといえますか、それはやっぱり世の中、かなり右にシフトして行って、若い世代がそういう風に思っている。基本は辻さんがおっしゃるように、我々の仕事は権力のチェック。それが第4の権力と言われて、それにおごることでメディア批判が出て来るということでいうと、我々も謙虚にならないといけないけれども、政治権力のチェックをおごなりにすると、世の中全体がおかしくなっちゃうという矜持は持っていないといけない。ただ、若い人、特にネットの世論というのは、猛烈に右に吹いているということで言うと、ネットの世界で批判されるのは権力ではなくて、メディアだという感じはこのところ、かなりありますね。「サンデープロジェクト」のときのスタンスは、権力のチェックというのは「ニュースステーション」「報道ステーション」「サンデーモーニング」にお任せするとして、我々は現実の皮を1枚めくったところにある、本当の姿をえぐり出すこと。その作業を、我々がやらなかったら、メディアとしてちゃんと仕事をしていないんじゃないかなと言われる。それは、その結果が政治権力のチェックにつながるかも分からないけれども、政治権力のチェックをすることが目的ではなく

て、現実のおもてに漂っている、ここを1枚めくったところにある、時代の本当の姿をえぐり出してくるということをやる。それが我々の取材する、ある種、特権を得ているわけですから。記者クラブで調査することができるということを利用して、それをやると。そういうことを続けているとすれば、視聴者の皆さんに信頼される結果につながるのではないかなど。それから、スタートの時点が、メディアは権力のチェックだというところに「サンプロ」は立っていなかったんですね。結果、政治のチェックになっていたかも分からないんですが。「サンプロ」で政治問題を扱って、自民党が、当時、社会党や野党とちゃんとやったことが、「サンプロ」に与野党出て来て喋って、潰れてしまうみたいなことが多いとかっていう風によく言われたんですけども。それは国民の目の前に晒け出して、本当にその法案でいいのということを徹底して調べてみると、まだまだ足りないということが白日の下に出て来る。だから政治はもう1回練り直してみたい。そういうことも含めて、現実を1枚めくったところにある本当の姿を出してくるというのがメディアの仕事かなど、「サンプロ」の経験者としては、そういう感じですね。

—— 考えていらっしゃるかもしれませんが、ポスト「おはようパーソナリティ道上洋三」というのは。

和田氏 これも経営レベルでいうと、大事な課題で、ポスト中村鋭一として道上洋三を育てた。僕が言うのは口幅ったいですけども、そういうことで言うと、道上さんはもう70歳ですので、それは大事なこと。MBSは浜村淳さんの後をどうするかという問題がある。一方で、ラジオがそれだけ長く信頼されて支持される。今でも関西のラジオ番組のトップが「おはようパーソナリティ道上洋三です」と「ありがとう浜村淳です」が前回の調査でも同率で2番組がトップなんですね。

という、長くやっていることの信頼感といいますか、それはあるんですが、明日、道上さんがどうなるか分かりませんから、常にポスト道上は考えておかなければいけない。これは考えているはずですよ。

—— そうなのは大事なことですし。

—— 勇気が要りますね。

和田氏 これ降りてもらおうというとき、ものすごく大変なんですね。僕は「サンプロ」のスポーツコーナーをやめるために、当時スポーツ担当していた東尾さんに「ちょっと中国飯店で食事したいんですけども」と。当時、やっていた東尾さん、「分かってる、分かってる。プロデューサーが飯食いたいと言うときは、降りてくれいうとき

やから」。で、そのときに「毎週5分のコーナーがなくなっても、時に渾身の企画で30分特集やりましょうよ」「そういうこと言って実現した試しがない」と。東尾さんのように言ってもらえると、ものすごく楽なんですけれども。今、一生懸命やっている人に降りてくださと言うのは大変で、しかし、それこそがプロデューサーがやる仕事で、しんどい仕事ほどプロデューサーの役割だと。そのためにプロデューサーは他のスタッフより高い給料をもらっていると。

—— 私、道上さんのラジオ番組の愛聴者なんです。ほとんど毎朝、以前は聞いていたんですね。最近、アシスタントが今年、気が付いたら代わってらっしゃって、アナウンサーになってから面白くないんですよ。素人のお嬢さんのほうがずっとやっぱり面白いんです。最近、だから聞かなくなったんです。

和田氏 今の人はアナウンサーじゃないんです。番組のスタッフなんですね。

—— そうですね。何かやっぱりね、慣れた感じが出てしまうんですね。その場の。だから、ちっとも面白くないという気がして、最近、本当に遠ざかっています。

和田氏 実は先ほど申しあげましたABCの番組を作っている、エー・ビー・シーメディアコムというところの社員スタッフです。以前に道上さんの番組のディレクターをやっていたんです。ディレクターを3年ほどやって、子供を出産してという。後任アシスタントを誰にするかというときに、道上から出て来たのが彼女でした。実はレーティング的に言うと、今のアシスタントになって聴取率が上がっているんです。

—— 上がりましたか。私の聞き方のほうがおかしかった。前のお嬢ちゃんは、気が付かないうちに代わったということですが、卒業しはったんですか。就職されましたか。

和田氏 6年間、長くやって、本人は朝日放送のアナウンサーになりたかったらしいんですが、なかなかそういうわけにはいかず、今、大阪大学大学院にいらっしゃると思います。

—— 非常に私的な質問で失礼いたしました。

—— 北野さん、どうぞ。

—— 今日はいいお話をありがとうございました。質問したい一つは、田原さんの番組がなくなったこと。最近、現場のことはあまり知らないの見当違いかも分かりませ

んが、これは消されたという印象が一般視聴者にはあると思うんです。これはどういう事情でなくなって、次に変わるものが全然違うものになっているのかということですね。もう一つは、ちょっと古い話ですが、「ニュースステーション」がスタートしたときに、これはどうなるかと思って、ライバル社としてニュースを見ていました。成功したのは最初、大阪的なニュースを大いに取り上げた。我々のメンバーの日下部吉彦（ABC）さんも半分出演していましたね。高槻・阿武山古墳で藤原鎌足のものともみられる大織冠らしい宝冠が見つかるというニュースを、よその系列が簡単に片づけたけたものを、ものすごく面白がってやりましたね。あれはやっぱり大阪の発想で、舞台が大阪だというだけではなく、ああいうものを面白がるというニュースをやらないと、ニュースが受けないだろうと思うんですよ。それがスタートで成功した理由だと僕は勝手に考えています。ところが、段々とそういうものがなくなっていったんです。大阪と東京のニュース感覚はだいぶ違うんですけど、大阪の発想がどんどんなくなって行って、僕は田原さんの番組はプラスとあるけれども、全国的に今、いろいろとお話になったけれど、東京のスタッフは世界を見ている。しかし、足元を見ていないというのを大阪では感じる。大阪の人間はね。そういう大阪の発想を、大阪的なジャーナリズムみたいなものが、やっぱり大阪局は守っていききたいと僕らは考えてきたんです。そういう傾向について、どういう風に考えておられるのか、この二つをね。

和田氏 一つ目のご質問の田原総一郎さんの番組が消されたということについては、テレビ朝日と朝日放送の共同制作で、共同セールス。すべて折半ということでやりました。セールスのほうがかなりしんどくなってきたこと。で、赤字。以前は「ゴールデンの番組より高い」とかっていうのを田原さんはよく、あちこちで自慢していたんですが、段々、セールス状況が悪くなってきて、多分、ABCのほうから続けられないということを出したと思います。テレビ朝日は、じゃあこの番組を終えても、次の番組も共同セールスでという話があったんですが、ABCが降りたという事情で。テレビ朝日はBS朝日で「激論！クロスファイア」という土曜日の10時の時間を田原さんに用意して、そのまま続けているというようなことです。21年か22年か続くと、やはり鮮度がなくなってきた。田原さんも当然、以前のような切れ味がなくなってきた。田原さんもよく言っていました、生番組なんで、固有名詞がもう頭に出て来なくて、高野さんとかに助けをもらうことが多いんだみたいなことを言っていました。どうしてもそこが一瞬、パッパッパといかなくなってきたというようなことが理由の一つだと。消されたというような理由は、僕はないと思っています。それと二つ目は何でしたか。

——— 「ニュースステーション」の初期には、大阪のニュースを見る考え方という受け手側

に立ったニュースの料理というのが大阪にはあると思うんです。それを多少、取り入れられたから、最初のスタートは非常に良かった。いいテーマがあったと僕は勝手に考えている。

和田氏 あれは枠を作るために、東京と大阪で焦点が二つあって、ラグビーボールのような形でという、久米宏さんと日下部吉彦さんとが喋ってみたいながあって。しかしながら、金曜日だけは「必殺」があるので、10時スタートが出来なくて、11時スタートと。それを「ニュースステーション」は逆手に取って、「金曜ステーション」という形でバラエティー色を強めた形をやって、ここから話題になっていったんです。スタートしてそういう形で定着していくプロセスの中に、大阪というのをもう一つの中心点としてあるものですから、先ほどの藤原鎌足の墓、これは牟田口章人という古代史の専門記者がそれを面白がって、自分で藤原鎌足の枕がこんなんだとか、これを久米宏さんが面白がってくれて、企画採用になったという。まあ大阪の要素を入れないといけないねという客観的な事情と、牟田口記者の面白がり方というのが、一つはあったんだと思います。他の局はそこまで考古学のニュースに重きを置かなかったということであろうと思うのですが。だんだん番組として三宅島の噴火とかフィリピンの政変とかそういう大きなもので視聴率が上がる、それが定着してくるみたいになってきて、テレビ朝日の力が大きくなっていく。エリアパワーは、当時は東京の2分の1、今や4分の1ぐらいに大阪はなっていますから、段々、東京中心になっていく。その中で「必殺」というのも終えて、金曜日も10時スタートになっていくというような中で、どんどん中身的に言うと東京中心になっていったということです。ただ、今でも「報道ステーション」になってからも、視聴率は大阪のほうが高いんです。3%ぐらい大阪のほうが高いんです。NHKのニュースは大阪も東京もほぼ同じぐらいの数字ですが、「報道ステーション」だけは大阪のほうが高いんです。

—— 徐々に大阪が頑張っていけないといけない。しかし、東京の停電は全国ニュースになるが、大阪の浸水は全国ニュースになるのかなあというのがね、これからますます、こうなっていくんじゃないかと思いますね。経済学が東京中心になればなるほどですね、そういう風になっていくから。大阪には特別の使命があるような気がして、そこをしっかりとやらないと。

和田氏 そうですね。やっぱり「サンプル」の後、編成をやりましたから、常にABCのポジションというのは、テレ朝に対して物申す系列局の代弁者として。まあ、系列局がなかなかテレ朝に物申しにくいのを、それをこういうことだなと理解して、代表して言うという、そういうポジションなんですけれども。段々、段々、こちらの力が。

—— MBSも多少、そんなところがあったけど。段々、それが薄れてきているのが、やっぱり離れてから残念に思っています。

—— 前会長に締めて頂き、ありがとうございます。

—— 共同制作・共同セールスというのは、とても珍しい形だと思いますが、今はもうどこかでやっていますか。そういう形で作っている番組はもうないですか。もう、あれが最後ですか。

和田氏 お正月の単発。「戦うお正月」というようなバラエティーですけど、それは共同制作・共同セールスでやっていますが、レギュラーで情報・報道系でというのはないといえますね。

—— どうも長い間、ありがとうございました。今日は朝日放送の現役の副社長 和田省一さんにお越しいただきまして、ラジオへの思い、テレビへの思い、まだまだ熱いものを感じさせていただきました。また現場に戻って何かお作りになられたいんじゃないかと。今日はどうもありがとうございました。

和田氏 こちらこそ、ありがとうございました。

(終了後にこんな質問が)

—— 和田さん、一番好きなラジオの番組とテレビの番組って何ですか。

和田氏 僕は日曜日2時からのエフエム東京「サンデー・ソングブック」という番組が好きです。山下達郎と竹内まりやが好きだということなので、ラジオ番組として優れているかというと全然、旧態依然としたものなんですが。テレビはやっぱりドラマですね。ドラマはその時々によってありますけれども、日テレであった「Mother」。坂元裕二さんの脚本のものはかなり注目しています。

—— ありがとうございました。

以上